

# 七つの謎・・・

沖縄県立  
埋蔵文化財センター  
企画展

## 沖縄貝塚時代中期 のミステリー

開催期間 2005.10.25～11.27



# 謎

沖縄県立埋蔵文化財センター

9.9199

## 目次

ごあいさつ	1
沖縄貝塚時代中期のミステリー	2
ミステリー1 遺跡立地の謎	4
ミステリー2 集落形態の謎	8
ミステリー3 土器文化の謎	10
ミステリー4 石斧の謎	12
ミステリー5 打製石鏃の謎	14
ミステリー6 磨石・石皿の謎	16
ミステリー7 食料残滓の謎	18
新たなるミステリー	20

### 凡例

1. 本書は、平成 17 (2005) 年 10 月 25 日 (火) から同年 11 月 27 日 (日) まで開催する企画展「沖縄貝塚時代中期のミステリー」の展示を補完する目的で編集したものである。
2. 当該企画展は、沖縄県立埋蔵文化財センターが主催し、開催する。
3. 本書の掲載事項は、展示の各セクションに沿って記載している。
4. 当該展示及び本書に関わる担当者と協力機関の芳名は巻末に記す。
5. 提供していただいた写真については、所属機関名を明記している。
6. 本書に掲載されている写真及びイラストの無断使用を固く禁ずる。

## ごあいさつ

考古学とは、遺跡・貝塚や遺物などの調査研究をとおして過去の人たちの文化や生活行動などを解明していく学問です。ことわざの「古きをたずねて新しきを知る」や故事の「温故知新」にあるように、過去を振り返るといことは、誤った歴史（戦争など）を繰り返すことがないように、より良い未来を築いていく指針ともなりえるのです。このように、すべての歴史は過去・現在・未来という1本のレールでつながっています。

沖縄には現在約2,500ヶ所の遺跡（埋蔵文化財）が確認されています。古い時代では那覇市の山下町第一洞穴遺跡（約32,000年前）や具志頭村の港川フィッシャー遺跡（約18,000年前）などが知られ、旧石器時代の遺跡であることが考えられています。また、およそ7,000年前には土器（爪形文土器）を使用していた人たちが沖縄・奄美に住みつき、その後、約1,000年前まで原始（先史）時代が続きます。この時代を沖縄では貝塚時代とも称し、日本本土の縄文時代・弥生時代とは異なった文化があったことがわかっています。

考古学研究は一般的に大昔の遺跡を発掘調査し、そこに残されている遺構（住居跡など）や見つかった遺物（土器や石器など）を詳しく調べ、当時の人たちの生活や文化などを解明していきます。ただ、数千年も経った遺跡から見つかるものは腐ることのない石や土、貝殻などで作った道具類が主で、植物で作ったものはほとんど残りません。

したがって、遺跡には当時の物がすべて残っているわけではなく、限られた情報をもとに推測していくため、不明な点も少なくありません。

今回の企画展では、沖縄貝塚時代中期（縄文時代晩期相当、高宮編年の前V期、約3,000年前～2,500年前）に焦点をあて、未だ解明されていない7つの謎について皆さんと一緒に考えていきたいと思ひます。

この企画展によって、ひとりでも多くの方が沖縄考古学の世界に触れ、埋蔵文化財について理解と関心を示すことになれば幸ひであります。

平成17（2005）年10月25日

沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 田場 清志

# 沖縄貝塚時代中期のミステリー

沖縄貝塚時代中期(高宮編年の前V期)とは、右に示した沖縄考古学編年の一時期のことで、およそ3,000年前から2,500年前までに位置づけられており、九州の縄文時代晩期に相当します。

この時期の遺跡は、一般的に石灰岩丘陵や台地の開けた場所(オープンサイト)に所在し、大規模な集落を形成していることが特徴的です。うるま市与那城の宮城島シヌグ堂遺跡では43軒<sup>たてあなじゅうきょ</sup>の竪穴住居跡が見つかっており(ただし、すべての住居が同時に建っていたわけではない)、ひとつのムラを形成していたことが考えられています。

住居跡の形状は、一辺が2~3mの大きさで、平面の形がほぼ四角形をなす竪穴住居を基本としますが、なかには一辺が5mを超す大型住居跡も確認されています。その他の遺構<sup>いこう</sup>では貯蔵穴<sup>ちよぞうけつ</sup>と考えられる土壇<sup>どこう</sup>や、住居跡に付帯する炉跡<sup>ろあと</sup>(地床炉<sup>ぢしやうろ</sup>)、柱穴<sup>ちゅうけつ</sup>、石列<sup>せきれつ</sup>などが見つかっています。

出土した遺物についてみると、土器は丸底<sup>まるぞこ</sup>ないし尖底<sup>せんてい</sup>の深鉢形<sup>ふかばちがた</sup>をなす「宇佐浜式土器<sup>うざはま</sup>」が主流で、同時期の奄美地域で主体をなす「宇宿上層式土器<sup>うしゆくじやうそう</sup>」と深い関わりがあることが知られています。石器では、貝塚時代前期に比べて石斧<sup>せきふ</sup>の大型化・重厚化が進み、磨石<sup>すりいし</sup>や石皿<sup>いしざら</sup>など堅果類(シイやカシなどのドングリ類など)をすりつぶすための道具が目立ちます。また、打製石鏃<sup>だせいせきぞく</sup>(矢じり)が多く見つかることも大きな特徴です。

以上、沖縄貝塚時代中期について、これまでの調査研究から幾多の事実関係はわかっていますが、不明な点や多くの謎が未解決のまま残されています。

今回の企画展では、多くの謎の中から以下の七つのミステリーに焦点を当て、沖縄貝塚時代中期の文化や社会について、考えていきたいと思えます。

ミステリー1：遺跡立地の謎

ミステリー2：集落形態の謎

ミステリー3：土器文化の謎

ミステリー4：石斧の謎

ミステリー5：打製石鏃の謎

ミステリー6：磨石・石皿の謎

## 沖縄の原始～グスク時代の時期区分（編年）

安里編年	社会と文化	遺跡のある場所	この時代に流行した 主 な 土 器 等	現行編年	高宮編年	日本	今からの 古 さ	
旧石器時代	未発見			旧石器時代	旧石器時代	旧石器時代	10,000年前	
新 石 器 時 代	渡 来 期	(1)	北から縄文人が渡来 ある程度の居住活動 九州的文化	海岸地帯	爪形文土器	草創期 早期	6,000年前	
		(2)	北から縄文人が渡来 九州的文化 個性化萌芽	海岸と台地崖下	条痕文土器 室川下層式土器 曾畑式土器	前期		5,000年前
		適応期	一応適応に成功するが少数 個性的文化成立	海浜と台地崖下	面縄前庭式土器	中期		
	拡散期	本格的適応、島々に拡散 個性化さらに進む	台地崖下と海浜	仲泊式土器 伊波式土器 萩堂式土器 大山式土器 室川式土器	後葉 前期	III期	3,000年前	
	発 展 期	(1)	人口増加と集落の形成	台地縁辺	カヤウチバンタ式土器 宇佐浜式土器 仲原式土器	前期		IV期
		(2)	集落の発展と海洋への適応 貝交易の展開	海浜	大当原式土器 具志原式土器 アカジャンガー式土器	中期	V期	
階級社会	農耕と鉄器の普及・海外交易 首長層の出現 グスクの形成と発達	小高い丘	カメヤキ グスク土器 貿易陶磁器	後期	後期	弥生時代 古墳時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	900年前	

※安里嗣淳（前沖縄県立埋蔵文化財センター所長）2002年11月に加除筆  
「復帰後三十年間の県内発掘調査展 図録」  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2002年11月

## ミステリー 1

# 遺跡立地の謎

標高 100m 前後の丘陵や台地に遺跡が形成されているのは何故か？

この時期の遺跡は、多くが丘陵や台地の高い場所に形成されています。うるま市与那城の宮城島では島の最も高いところ（標高 100m 前後）にシヌグ堂遺跡・高嶺遺跡<sup>たかみね</sup>があります。国頭村<sup>うきはま</sup>の宇佐浜遺跡やカヤウチバンタ遺跡も丘陵（標高 90～95m）に形成されています。徳之島伊仙町<sup>きねんうえはら</sup>の喜念上原遺跡にいたっては標高約 235m の山頂に立地し、はるか眼下に見える砂丘地には貝塚時代前期と同後期の貝塚からなる面縄貝塚群<sup>おもなわ</sup>が点在しています。

何故、この時期の遺跡がわざわざ高所（主要な食料でもあった魚介類の採れる海からも遠く、水の便も悪い）に所在するのか不思議ですね。



安須森からみた宇佐浜遺跡（上）と長尺原遺跡（下）  
（国頭村）



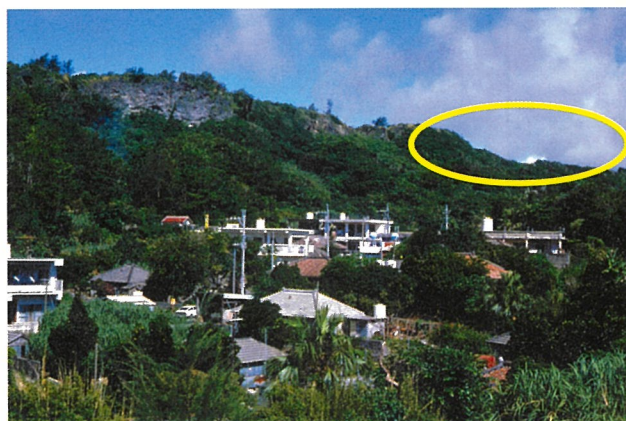
宇佐浜遺跡（国頭村） 後方の丘陵が安須森

これまでに次のような理由が考えられてきましたが、いずれも推察の域を出ていません。

- ① 沖縄各地に見られる砂丘（新期砂丘）の形成時期が約 2,000 年前と考えられていることから、居住区域が台地や丘陵上に限られていた。
  - ② 開けた場所にムラ（集落）を形成していることや、当時の畑跡と思われる畝状遺構が検出されている（宜野湾市の上原濡原遺跡）ことなどから、原初的な農耕が行われていた。
  - ③ 打製石鏃の増加は単に弓矢による狩猟の発達を意味しているのではなく、武器として使用され、外敵から身を守るため高い場所に居住するようになった。
- 等々、いずれも妥当な理由と思われませんが、あなたはどのように考えますか。



知場塚原遺跡（本部町）



宮城島シヌグ堂遺跡（うるま市与那城）

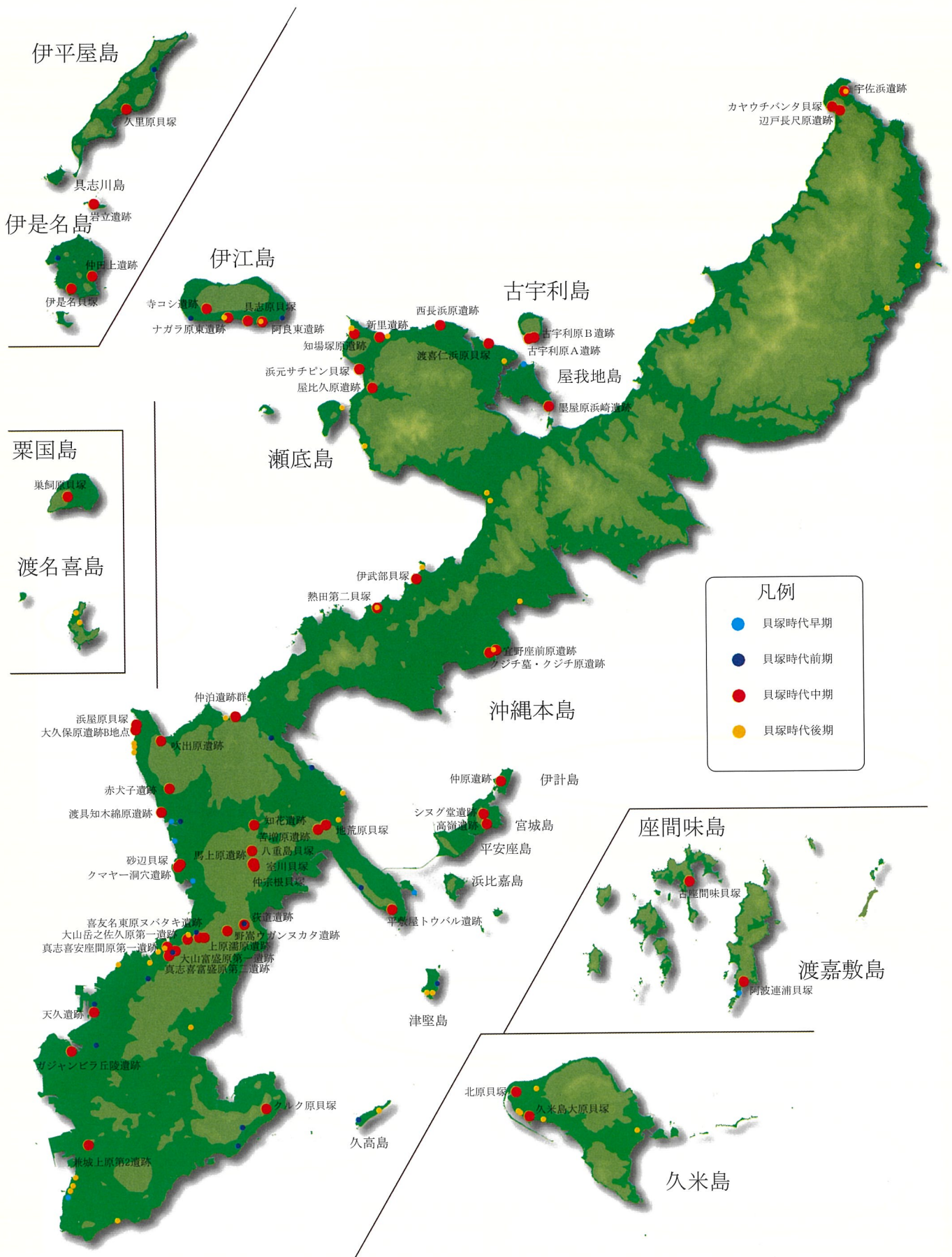


宮城島高嶺遺跡（うるま市与那城）



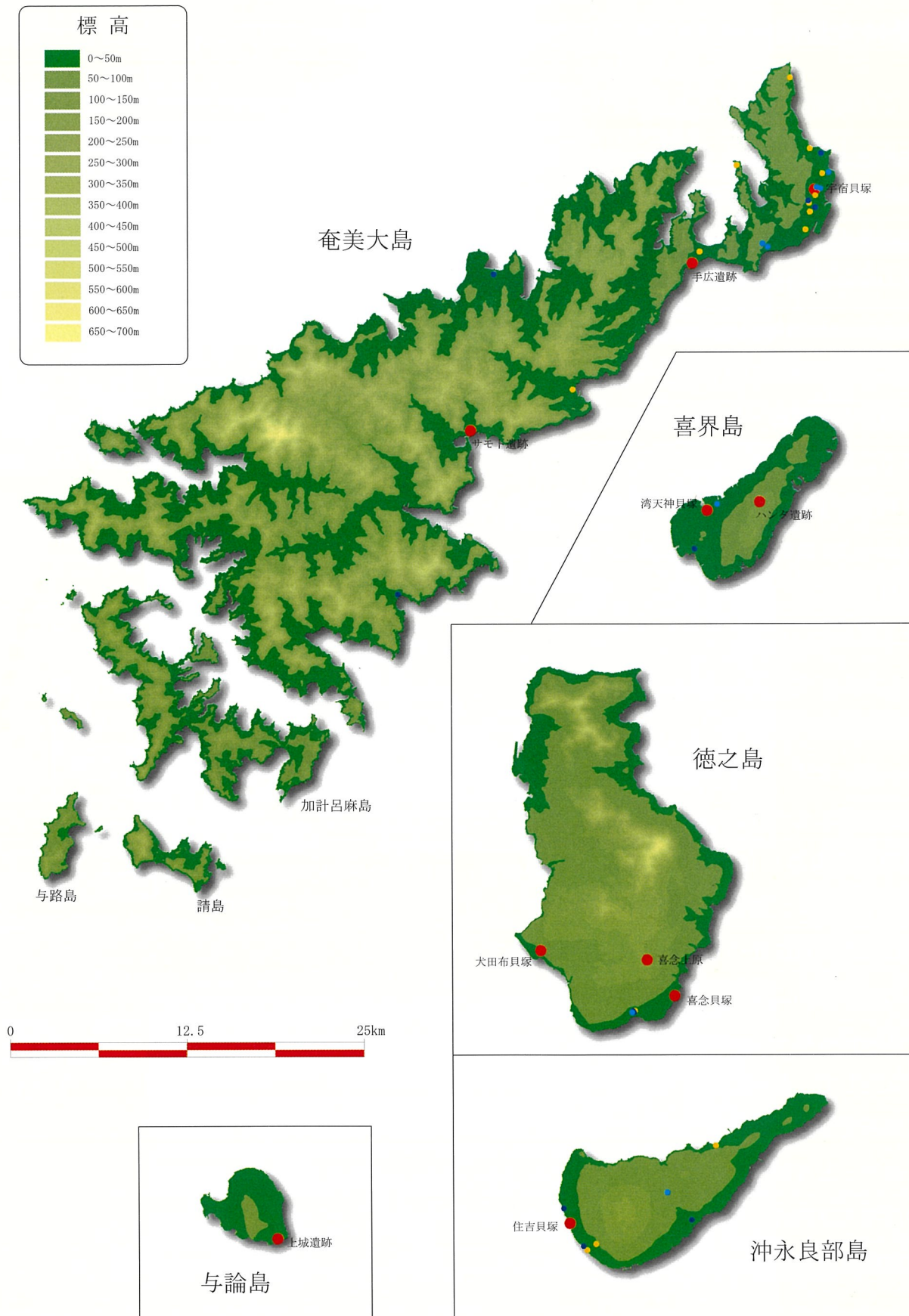
屋比久原遺跡（本部町）

# 貝塚時代主要遺跡分布図（沖縄）





# 貝塚時代主要遺跡分布図（奄美）



# ミステリー2 集落形態の謎

## 突然に大規模な集落が出現したのは何故か？

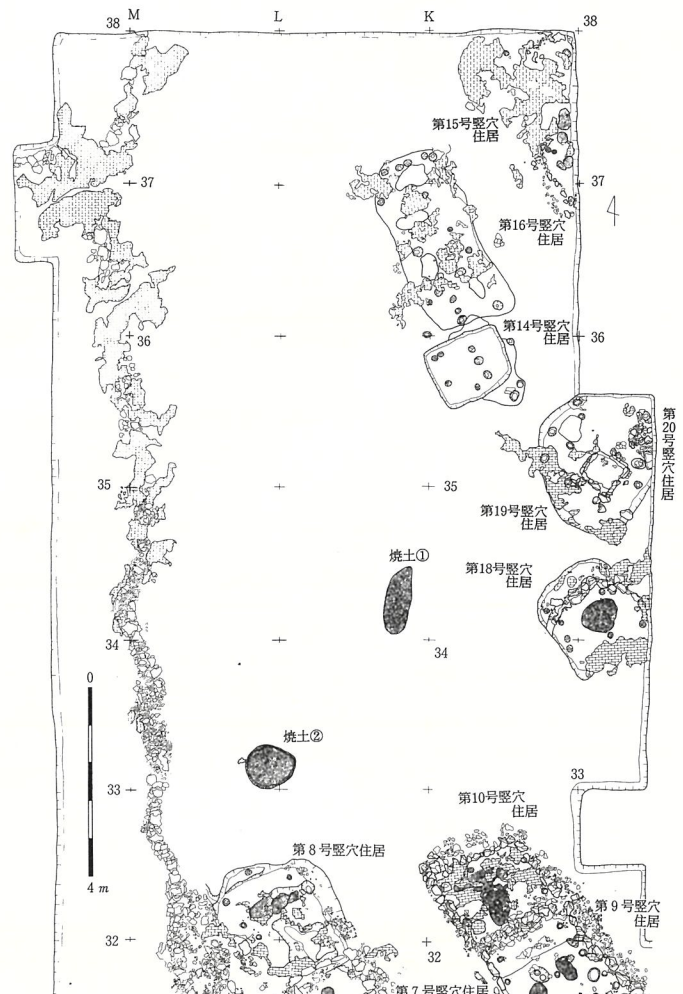
この時期の遺跡からは、<sup>たてあなじゅうきよあと</sup> 竪穴住居跡を主体に<sup>どこう ちよぞうけつ</sup> 土壌（貯蔵穴？）や<sup>ろあと ちゅうけつ</sup> 炉跡、柱穴など住まいに関する<sup>いこう</sup> 遺構が数多く見つっています。代表的な遺跡としては、国頭村の<sup>うざはま</sup> 宇佐浜遺跡・カヤウチバンタ遺跡、本部町の<sup>ちばつかはら</sup> 知場塚原遺跡・<sup>やびくぼる</sup> 屋比久原遺跡、うるま市与那城の<sup>みやじま</sup> 宮城島シヌグ堂遺跡・<sup>たかみね</sup> 宮城島高嶺遺跡・<sup>なかぼる</sup> 伊計島仲原遺跡、宜野湾市の<sup>きゆうな あがりぼる</sup> 喜友名東原ヌバタキ遺跡などが知られています。いずれも広い範囲に10軒から30数軒の竪穴住居跡が検出されており、ムラ（集落）を形成していたと考えられています。

しかし、それらの竪穴住居跡がすべて同時期につくられたものかと言いますと、違います。一部の竪穴住居跡は貝塚時代前期のものがあり、同じ場所に時期を違えて集落が存在していたことを物語っています。ただ、貝塚時代前期の竪穴住居跡の数に比べて、貝塚時代中期のものが圧倒的に多いということは、集落が大規模になった証でもあります。

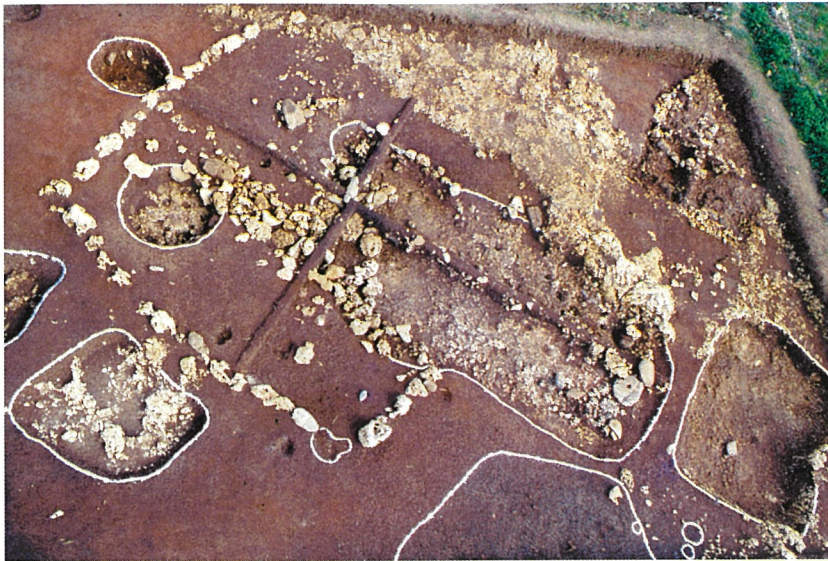
はたして、前期の貝塚人が引き続き同じ場所で生活をし、中期の文化を形成したのでしょうか。それとも、前期と中期の貝塚人は別の集団で、偶然に同じ場所を居住区域にしていたのでしょうか。



宮城島シヌグ堂遺跡（うるま市与那城）の住居跡



宮城島高嶺遺跡（うるま市与那城）の住居跡



知場塚原遺跡（本部町）の大型住居跡と土壙



住居跡の切り合い関係（宮城島シヌグ堂遺跡）

右側の住居跡を左側の住居跡が切っていることから、右側の住居跡が左側のそれより時期的に古いことがわかる。



伊計島仲原遺跡（うるま市与那城）の復元家屋

## 沖縄諸島と奄美諸島の土器文化が同化するの何故か？

沖縄貝塚時代前期（高宮編年の前Ⅳ期）は、沖縄諸島（以下、沖縄）と奄美諸島（以下、奄美）では形や文様などが異なった土器を使用していました。右図に示したように、沖縄では伊波式土器<sup>いはしき</sup>や荻堂式土器<sup>おぎどうしき</sup>、大山式土器<sup>おおやましき</sup>が主流をなすのに対して、奄美では嘉徳Ⅰ式土器<sup>かどくいちしき</sup>、嘉徳Ⅱ式土器<sup>かどくにしき</sup>、面縄東洞式土器<sup>おもなわとうどうしき</sup>といった独特の土器文化を有していました。

貝塚時代前期後半になると、沖縄では口縁部<sup>こうえんぶ</sup>が肥厚し、平底<sup>ひらぞこ</sup>の径が小さくなる特徴を持つ室川式土器<sup>むろかわしき</sup>が出現するようになります。奄美では口縁部と肩部に凸帯<sup>けんぶ</sup>をめぐらす面縄西洞式土器<sup>おもなわせいどうしき</sup>と呼ばれる土器が盛行しますが、沖縄と奄美はまだ異なった土器文化でした。

ところが、貝塚時代中期になると、喜念Ⅰ式土器<sup>きねんいちしき</sup>と呼ばれる土器（口縁部が肥厚し、頸部<sup>けいぶ</sup>がすぼまり、胴部<sup>どうぶ</sup>の張る丸底<sup>まるぞこ</sup>の深鉢形<sup>ふかばちがた</sup>で、口縁部および肩部に微細な凸帯をめぐらし、凸帯の両脇<sup>てんこくもん</sup>に点刻文<sup>てんこくもん</sup>を施す）が沖縄と奄美で使用されるようになり、両地域の土器文化が同化する傾向にあります。その後、沖縄では宇佐浜式土器<sup>うざはましき</sup>、奄美では宇宿上層式土器<sup>うしゆくじょうそうしき</sup>と称される酷似した土器が現れ、いずれも喜念Ⅰ式土器の特徴を受け継いでいます。さらに、貝塚時代中期後半に属する仲原式土器<sup>なかばるしき</sup>も沖縄、奄美で盛んに使用されていました。

このように、貝塚時代前期には別々の土器文化を持っていた沖縄と奄美が、貝塚時代中期に突然のように同じ土器文化を有するようになり、そのことが何を意味しているのか、大きな謎となっています。

また、これらの土器は、沖縄・奄美だけではなく、北はトカラ列島（中の島タチバナ遺跡）、屋久島（一湊松山遺跡<sup>いっそうまつやま</sup>）、鹿児島<sup>みなみすりがはま</sup>の指宿市（南摺ヶ浜遺跡）でも見つかっており、土器文化の担い手の行動範囲が予想以上に広がっていたことがうかがえます。

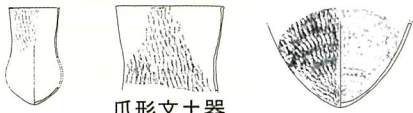


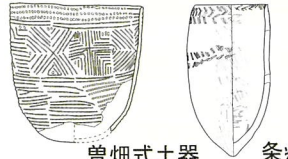


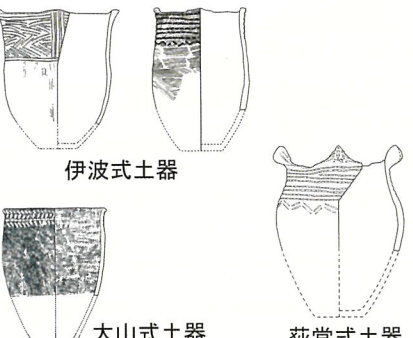
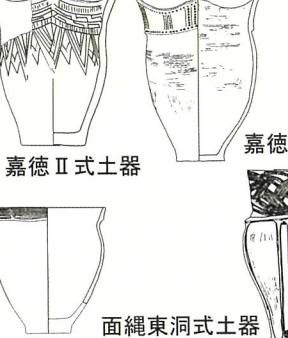
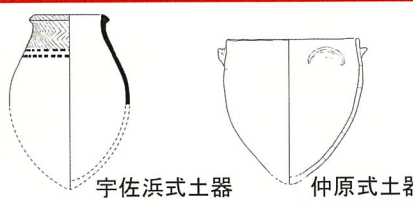
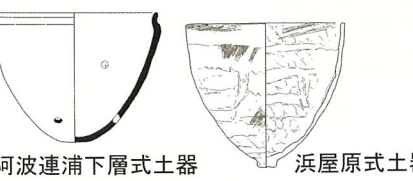
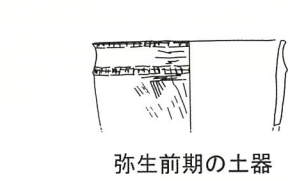
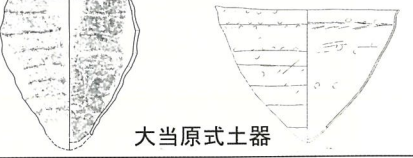
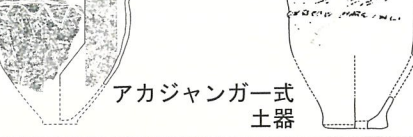
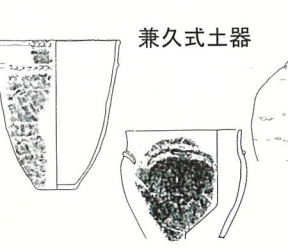
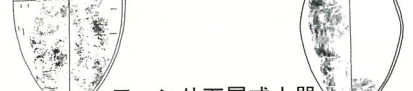


伊計島仲原遺跡の土器



竪穴住居内の土器（宮城島シヌグ堂遺跡）

# 沖縄諸島と奄美諸島の土器編年

沖繩 現行編年	高宮編年	沖縄諸島の主要土器	奄美諸島の主要土器	九州	
旧石器時代	旧石器時代			旧石器時代	
貝塚時代	早期	前Ⅰ期  爪形文土器	 爪形文土器	早期	
		前Ⅱ期  条痕文土器 室川下層式土器	 曾畑式土器 条痕文土器		前期
		前Ⅲ期  仲泊式土器 面縄前庭式土器	 面縄前庭式土器		
	前期	前Ⅳ期  伊波式土器 大山式土器 荻堂式土器	 嘉徳Ⅱ式土器 嘉徳Ⅰ式土器 面縄東洞式土器	後期	
					中期 前Ⅴ期  宇佐浜式土器 仲原式土器
	後期	後Ⅰ期  阿波連浦下層式土器 浜屋原式土器	 弥生前期の土器	前期	
					後Ⅱ期  大当原式土器
		後Ⅲ期  アカジャンガー式土器	 兼久式土器	後期	
		後Ⅳ期  フェンサ下層式土器			古墳時代～平安時代

## ミステリー4 石斧の謎

### 貝塚時代前期に比べて、石斧が大型化・重厚化するのは何故か？

貝塚時代中期になると、前時期（貝塚時代前期）の石斧<sup>せきふ</sup>に比べて大きさや重さが増し、数量も多くなります。また、石斧の形や、丁寧なつくりなどから、この時期に完成の域に達していたことがうかがえます。

まだ金属器を知らないこの時期の人たちにとっては、石斧は万能の利器<sup>りき</sup>として重宝されていました。主に立木の伐採や木材加工に使用されていた石斧は、形・大きさ・重さの違いで使用方法が異なっていた（機能の違い）ことが考えられます。現在確認されているこの時期の石斧で最大なものは、うるま市与那城<sup>たかみね</sup>の宮城島高嶺遺跡から出土した石斧で、長さ

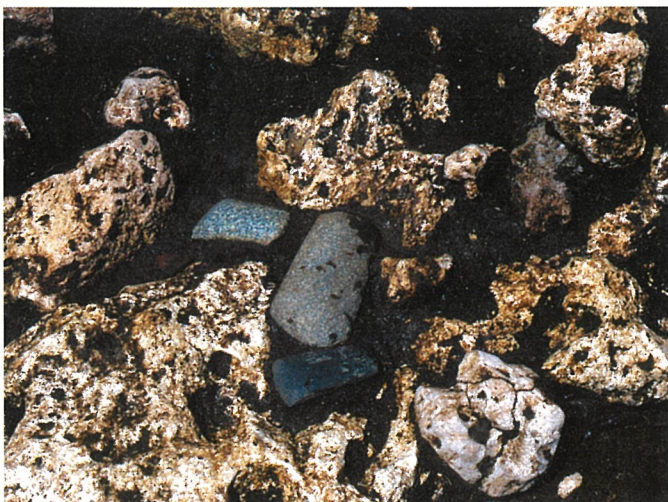


石斧の出土状況（宮城島高嶺遺跡）

26.7cm、幅 9.5cm、厚さ 4.5cm、重さが 2,100 g もあります（上の写真）。

石斧に用いられる岩石（石材）の種類は、緑色岩類・硬砂岩などの堆積岩がほとんどです。これらの岩石の特質として、ある程度の硬さ、衝撃に耐える粘り強さ、加工の容易さなどがあり、当時の人たちは経験や先人からの言い伝えなどで石斧に適した岩石の種類を知っていたと思われます。ただ、これらの岩石はどこにでもあるというわけではなく、沖縄本島北部や慶良間諸島など、一部でしか採れません。琉球石灰岩地帯の沖縄本島中・南部の遺跡から見つかる石斧は、これらの地域から製品もしくは石材として持ち込まれたことがわかります。すなわち、当時の人たちの行動範囲が岩石（石材）の産地を調べることによって解明できます。

さて、貝塚時代中期になると石斧が大型化・重厚化および数量が増えるのは如何なる理由からでしょうか。この時期の遺跡は、開けた石灰岩丘陵や台地に形成され、大規模な集落（ムラ）をなしていたことがわかっています。ムラづくりのための開発で樹木の伐採、および住居の建築ラッシュにより大量の木材を必要としていたのでしょうか。



石斧の出土状況（宮城島高嶺遺跡）



貝塚時代前期の石斧



貝塚時代中期の石斧



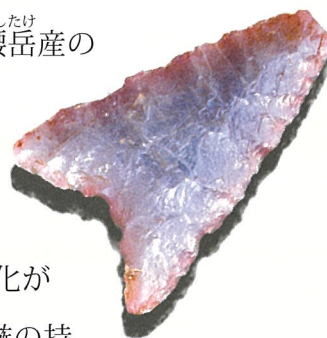
石斧の使用方法 (推定)

## ミステリー5 打製石鏃の謎

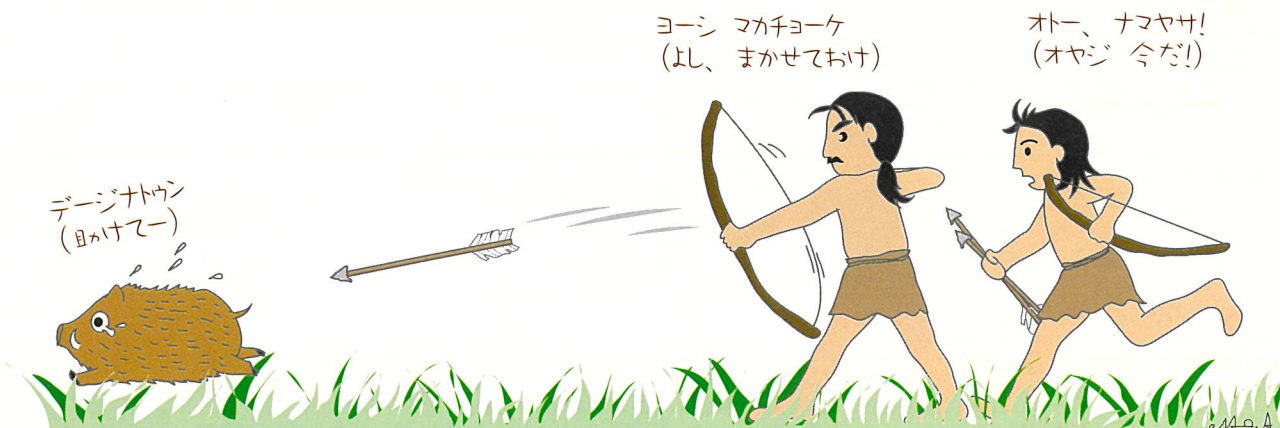
弓の矢じりとして使用された打製石鏃が増えるのは何故か？

沖縄・奄美諸島に産しない黒曜石<sup>こくようせき</sup>や、主に本部半島で採れるチャートという岩石（石材）で作られた打製石鏃<sup>だせいせきぞく</sup>が貝塚時代中期の遺跡から多く見つかっています。九州では縄文時代、弥生時代をとおして石鏃は普遍的な石器ですが、沖縄ではこの時期に目立つ程度で、貝塚時代早・前期および貝塚時代後期には少なく、数点しか知られていません。ちなみに、沖縄最古の石鏃は読谷村渡具知東原遺跡<sup>とぐちあがりぼる</sup>から室川下層式土器<sup>むろかわかそうしき</sup>に伴って出土したチャート製の1点で、約5,000年前の貝塚時代早期（高宮編年の前Ⅱ期）に位置づけられています。

沖縄では石鏃の出土数が少ないことから、弓矢を用いた狩猟方法はあまり発達していなかったことが考えられていますが、この時期だけ増加する傾向にあるのは何故でしょうか。また、黒曜石はこれまでの分析研究から佐賀県の腰岳産<sup>こしたけ</sup>のものであることがわかっています。それが沖縄に持ち込まれているということは、何らかの交流があったことがうかがえます。



遺跡が台地や丘陵など高い場所に所在することや、土器文化が奄美諸島と同化することなどから、沖縄諸島における打製石鏃の持つ意味は、単に狩猟用のためだけにあったものでしょうか。それとも武器として外敵に備えたものなののでしょうか。打製石鏃の謎はますます深まるばかりです。



弓矢によるイノシシ猟（推定）





打製石鏃（上：宮城島シヌグ堂遺跡、下：宮城島高嶺遺跡）  
左下2点は黒曜石製、他はチャート製



打製石鏃（兼城上原第二遺跡）  
糸満市教育委員会文化課所蔵  
右下1点は黒曜石製、他はチャート製



打製石鏃に用いられた石材（左：黒曜石、右：チャート）

## ミステリー6 磨石・石皿の謎

木の実や穀物などを磨りつぶすための粉食用道具（叩石・磨石・石皿）が増えるのは何故か？

粉食とは、シイの実・カシの実などのドングリ類や、小麦などの穀物類を磨りつぶして粉状にし、それを練り、クッキー状やパン状に焼いたり蒸したりして食べるということです。本州地域では、長野県の曾利遺跡<sup>そり おんだし</sup>や山形県の押出遺跡などで実際に見つかっており、縄文クッキーとも称されて、縄文時代の主要な植物食であったようです。

それでは、沖縄はどうかといいますと、今のところクッキーのようなものは見つかりません。ただ、貝塚時代中期では、今帰仁村の西長浜原遺跡<sup>にしながはまぼる</sup>、うるま市具志川の苦増原遺跡<sup>にがましぼる</sup>、うるま市与那城の宮城島シヌグ堂遺跡<sup>どう</sup>、宮城島高嶺遺跡<sup>たかみね</sup>などで、オキナワイタジイ・オキナワウラジロガシ・タブノキなどの木の実が炭化してまとまった状態で出土していますので、粉にする前の材料としてあったことになります。

また、これらのドングリ類を粉状にするための道具類として、たたき潰すための叩石<sup>たたきいし</sup>、すり潰すための磨石<sup>すりいし</sup>と石皿<sup>いしざら</sup>が3点セットであります。これらの石器は時期や地域を問わず普遍的に知られていますが、沖縄では貝塚時代中期に増える傾向にあります。このことから植物質食料の利用が盛んになり、穀物の栽培や原初的な農耕が行われていたという学説（沖縄中期農耕論）が提唱されたことがありました。宜野湾市の上原濡原遺跡<sup>うえはらぬーりぼる</sup>で畝状遺構<sup>うねじょういこう</sup>が確認され、話題を呼んだのも記憶に新しいところです。ただ、上原濡原遺跡以外では農耕を示す遺構が確認されておらず、この時期に果たして農耕がおこなわれていたのかということは、これからの大きな課題となっています。



磨石と石皿の使用方法（推定）



豎穴住居跡で検出された石皿（右）と磨石（左）（本部町知場塚原遺跡）



豎穴住居跡で見つかった石皿（国頭村宇佐浜遺跡）

## ミステリー7 食料残滓の謎

### 当時の主要な食料であった魚介類や動物の骨などが少ないのは何故か？

これまでの遺跡立地論では、沖縄本島中・南部の遺跡は貝塚時代前期が琉球石灰岩丘陵の崖下に、貝塚時代中期は崖上の開地（オープンサイト）に形成されているということになっていました。崖下には貝塚を形成する遺跡が多々あり、うるま市石川の伊波貝塚や北中城村の萩堂貝塚などが代表的な遺跡となっています。崖上においては住居跡を伴う遺跡が多く見つかりますが、貝塚そのものはほとんど発見されていなかったため、植物質食料に依存していたことが考えられていました。主な遺跡として国頭村の宇佐浜遺跡や宜野湾市の喜友名東原ヌバタキ遺跡、うるま市与那城の宮城島シヌグ堂遺跡などが知られています。

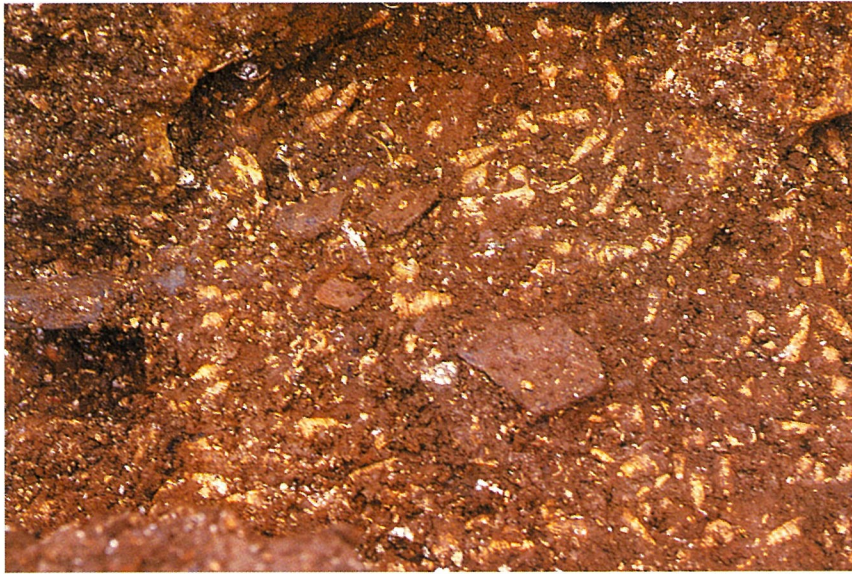
はたして、貝塚時代中期の人たちは魚介類や肉類を食料として摂取していなかったのでしょうか。近年の調査事例では、竪穴住居跡の中から貝殻やイノシシ骨・魚骨が見つかります。ただ、貝塚時代前期のように貝塚を形成するまでにはいたりません。

何故、貝塚時代中期には貝塚が残っていないのでしょうか。その理由として次のことが考えられます。

- ①貝塚時代中期に原初的な農耕が行われており、現在と同じような食生活をしていました。すなわち、魚介類はおかずであった。
- ②貝殻や獣魚骨（食料残滓）の捨て場が別の場所にあり、貝塚人もゴミ処理をきちんとやっていた。
- ③貝塚時代前期の住居跡も崖上の開地で見つかる場合があり、同じ場所に集落を営んだため、貝塚も同じ場所にある。



貝塚時代前期の貝層（石川古我地原貝塚）



土器や貝殻の出土状況（石川古我地原貝塚）



貝塚時代後期の貝類出土状況（伊江島具志原貝塚）



シャコガイなどの大型貝（伊江島具志原貝塚）

# 新たなるミステリー

はたして、貝塚時代中期は弥生時代相当期になるのか？

沖縄貝塚時代中期の文化や社会について、これまでの調査研究によって多くの事実関係が解明されてきましたが、謎もまた数多く残っています。

このような中、2003年に国立歴史民俗博物館プロジェクトチームによって衝撃的な発表がなされました。それは、放射性炭素年代測定（AMS法）による分析研究の結果、従来の弥生時代開始期（約2,500年前）がさらに500年も遡り、およそ3,000年前になるということです。この発表によって、日本考古学界はもとより弥生文化の起源地（伝播元）である韓国や中国の考古学研究者も巻き込み、大激震が起きたことは記憶に新しいものがあります。特に、弥生文化の発祥地でもある九州の研究者はこぞって反論を唱え、現在でも賛否両論が渦巻いています。

この発表が何故、沖縄でも問題になるのかといいますと、沖縄貝塚時代中期は九州の縄文時代晩期に相当し、年代的には約3,000年前から2,500年前までの時代として捉えられています。この時期に後続する貝塚時代後期前半（高宮編年の後Ⅰ期・後Ⅱ期）が弥生時代に相当し、実際に貝交易（弥生時代の前期後半から中期にかけて、沖縄産の大型巻貝であるゴホウラとイモガイが貝輪の材料として九州に数多く運ばれている）の見返り品として、九州の弥生文物（弥生土器や金属製品、ガラス小玉など）が沖縄に持ち込まれていることから時代決定ができます。

また、貝塚時代後期前半の遺跡は、そのほとんどが海岸近くの砂丘地に所在し、大規模な貝塚を形成しています。さらに、使用された土器も貝塚時代中期のものとは形や大きさなどが大幅に違います。このようなことから、貝塚時代中期の社会・文化と、同後期のそれとは一線を画することができるほど異なっていることがわかります。

貝塚時代中期を代表する、宇佐浜式土器の放射性炭素年代測定値が約3,000年前から2,800年前と出ており、もし、国立歴史民俗博物館プロジェクトチームの研究結果が正しいとすると、沖縄の考古学編年はもとより、日本考古学編年を根底から見直す必要があります。

- 企画・編集：岸本義彦
- 原稿執筆：岸本義彦・金城亀信・瀬戸哲也・羽方 誠・片桐千亜紀・山本正昭
- デザイン：金城友香・比嘉尚輝
- イラスト：青山奈緒
- 模型製作：片桐千亜紀・伊波直樹・崎原恒寿
- 展 示：岸本義彦・玉城照美・仲間留美・與古田愛・喜納ひとみ・宮城奈緒  
・山田浩久
  
- 協力機関：糸満市教育委員会文化課



平成 17 年度 沖縄県立埋蔵文化財センター企画展  
「沖縄貝塚時代中期のミステリー」

2005 年 10 月 25 日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県西原町上原 193-7

TEL 098-835-8752

FAX 098-835-8754

## ご案内

第20回文化講座

### 「沖縄貝塚時代中期のミステリー」

【日時】 11月12日(土) 午後2～4時

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

【講師】 堂込 秀人(鹿児島県教育庁文化財課)

- 開所時間 午前9時～午後5時(入所時間は4時半まで)
- 休 所 日 毎週月曜日、国民の休日(こどもの日、文化の日を除く)  
年未年始(12月28日～1月4日)、慰霊の日(6月23日)  
※祝日と月曜日が重なったときは、翌火曜日も休所
- 交 通 ◇沖縄自動車道西原ICより 車7分  
◇市外線バスターミナル発97番  
「琉大附属病院前」下車 徒歩1分

## 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7  
TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754